

上甌島里方言の形態音韻論

にしとうしょぶ
——九州西岸部・西島嶼部方言文法の記述のために——

黒木 邦彦

1 はじめに

上甌島^{かみこしきしま}は串木野新港^{くしきのしんこう}(鹿児島県いちき串木野市)の西方約 38km の東シナ海上に浮かぶ鹿児島県の離島^{なかくしきしま しもこしきしま}で、中甌島、下甌島などと共に甌島列島を形成している (cf. 図 1)。

同島里町^{さとちよう}(鹿児島県薩摩川内市)¹の伝統方言(以下“里方言”)の音韻は、現代標準日本語(以下“標準語”)のそれとは異なる。

たとえば、両者の語形は、分節音レベルでは表 1 (次頁)のように対応している:

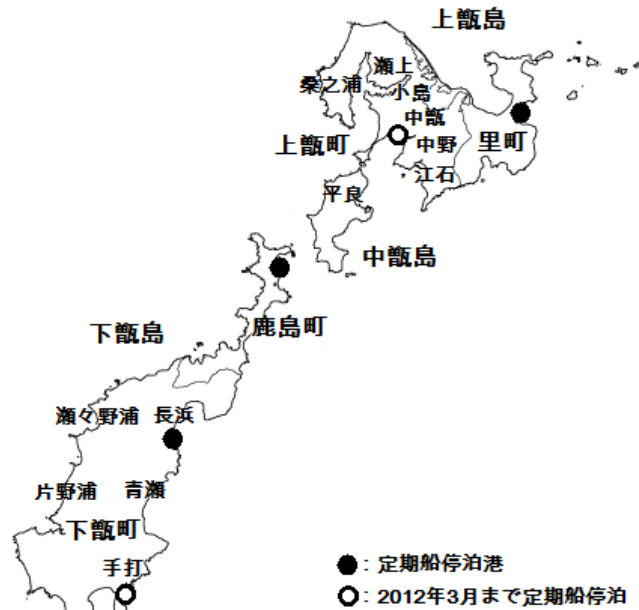


図 1 甌島列島

¹ 2011 年度の人口は 1,314 人で、甌島列島 4 町中 3 位に留まる。ただし、別表 1 のとおり、大字の単位で見れば、里町唯一の大字である里は、同列島一の人口を抱えている:

別表 1 甌島列島 4 町の大宇と 2011 年度の人口

里町	里							
1,314	1,314							
上甌町	中甌	中野	江石	平良	小島	瀬上	桑之浦	
1,532	547	53	175	309	172	212	64	
鹿島町	藺牟田							
517	517							
下甌町	手打	片野浦	瀬々野浦	青瀬	長浜			
2,298	790	167	205	229	907			

里町は甌島列島の中では最も本土に近く、同列島内で本土からの連絡船が最初に停泊するのは、同町里港である。また、2012 年 4 月以降、上・中甌島で本土との連絡船が停泊するのは、同港だけになった(同年 3 月までは上甌町中甌港にも停泊)。

表3 里方言の名詞基幹句 (助詞句)

	[k ^h a: toi to:k ^h i a:ku ike koko ika hoŋ]
	‘貝’ ‘鳥’ ‘時’ ‘灰汁’ ‘池’ ‘此处’ ‘イカ’ ‘本’
属-主格	[k ^h ia:no toino to:k ^h iŋ a:kuŋ ikeŋ kokoŋ ikaŋ honno]
向格 ⁺	[k ^h a:ni to:i to:k ^h i: a:k ^h i: ike: koke: ik ^h a: hoŋni]
主題	[k ^h a:wa to:ja: to:k ^h a: a:ka: ik ^h a: koka: ika: honna]

(注) <向格⁺> は <向-与-処-時-様-結果格> (あるいはこれ以上) に相当する。

の危機にある。しかし、伝統方言の中で、危機言語・方言の記録・保存に必要とされる文法書、辞書、テキスト (= 会話、独り語り、民話 etc.) を全て揃えているものは、極めて少ない。

その中で見れば、里方言の記録・保存は比較的進んでいる。次のように、地元の有志が定期的にそれを行なっている:

- (1) a. 荒木 博之 (編) (1970): 民話集
- b. 里郷土史編纂委員会 (編) (1985): 辞書
- c. 里村教育委員会 (編) (2003): 民話集
- d. 小川 辰雄 (2012): 辞書

次のように、先行研究は多いとは言えない:

- (2) a. 上村 孝二 (1936): 方言系統論
- b. 上村 孝二 (1937): 語彙考 (≡ 語源考)
- c. 上村 孝二 (1941a): アクセント研究
- d. 児玉 望 (2012): アクセント研究

(1, 2) から分かるように、文法の記述は極めて少ない。(1b) が文法的一端を書き留めているものの、包括的・体系的な文法書はない。形態論と統語論とは共に貧弱で、音韻論もアクセント研究に偏っている。

よって、本研究は、先行研究の欠を埋めるという点でも有意義であるように思う。

3 資料

本発表で利用する里方言資料は次の2種3類から成る:

- (3) a. 発表者が母方言話者 [表4: イーチ] (次頁) に行なった調査で得たもの。
 - i. 母方言話者との面接調査で得たもの。
 - ii. 母方言話者同士の自然談話から得たもの。

表 4 被調査者

ID	生年	性別	外住歴	調査年	面接	談話
イ	1920's	男	15-18: 鹿児島県某所	2012		
ロ	1920's	女	10代の約1年間: 熊本県	2009-11		
ハ	1920's	女	ナシ	2012		ナシ
ニ	1930's	女	ナシ	2012		
ホ	1930's	男	0-8: 広島県広島市	2009-12		
ヘ	1930's	女	15-21: 鹿児島県鹿児島市	2012		ナシ
ト	1940's	男	15-35: 兵庫県神戸市	2012		ナシ
チ	1950's	男	15-18: 鹿児島県鹿児島市 18-22: 関西圏, 関東圏	2009-11		

b. 既刊書から得たもの。いずれもピッチは不明。

時間の制約などがあって、全ての被調査者に同質・同量の面接調査を実施することは叶わなかった。面接調査で得た資料の多くは、話者 [ロ, ニ, ホ, ト, チ] からのものである。

(3) のとおり、本発表の里方言資料は一様ではない。記述にあたって話者の属性 (年齢, 性別, 出身 etc.) が問題になる時は、適宜言及する。

なお、発表者の印象に拠れば、生まれの早い話者ほど伝統的な里方言 (= 文献 (1b-e) に収録されている里方言) を保持している (外住歴の長さの影響は不明)。発表者の被調査者の中では、話者 [イ, ロ, ニ] がそれに該当する。

4 里方言の音韻

4.1 音素目録

里方言の音素目録は次のとおり:

- (4)
- 母音音素 (V): /i/ [i], /u/ [ü] (便宜的に [u] を代用), /e/ [je ~ ^je]³, /o/ [o], /a/ [a]
 - 半母音音素 (G): /j/ [j]
 - 子音音素 (C): /p/ [p], /b/ [b], /f/ [ɸ], /m/ [m], /w/ [w], /t/ [t], /d/ [d], /c/ [ɕ], /s/ [s], /z/ [z ~ ɰ], /n/ [n], /r/ [r], /k/ [k], /g/ [g], /h/ [h]⁴

³ [e] は [j] を不明瞭に発することを示す。

⁴ /f, h/ は語頭に集中している (ex. /toofu/ B ‘豆腐’, /aho/ ?? ‘母’)。しかし、両者と形態音韻的に交替す (次頁に続く)

d. モーラ音素 (M): /Q/ [-res, ○PA], /N/ [+nas, ○PA]

(注1) ○A: 素性 A は未指定

(注2) /Q/ は音節末の阻害音 (=長阻害音の前半)。/N/ は音節末の鼻音。両者の調音点は直後の子音のそれに同化する。

/e, z/ の異音条件は次のとおり:

(5) /j/ → [je] / #__ /z/ → [z] / V__
 → [jⁱe] / elsewhere → [ɟz] / elsewhere

子音音素 (4c) の大半は、条件 “__i” (= /i/ の直前) で次のように実現する:

(6) /p/ → [pⁱ] /b/ → [bⁱ] /m/ → [mⁱ] /c/ → [tɕⁱ] /s/ → [ɕⁱ] /z/ → [z ~ ɟz]
 /n/ → [nⁱ] /r/ → [rⁱ] /k/ → [kⁱ] /g/ → [gⁱ] /h/ → [çⁱ]

(6) は、条件 __i で規則的に生じる口蓋化異音である。したがって、[CⁱV] とその他の [C^jV] とは次のように区別する:

(7) /C/: /Ci Cu Ce Co Ca/ /Cj/: /* Cju (Cⁱe) Cjo Cja/
 [Cⁱi Cu Ce Co Ca] /* Cⁱu (Cⁱe) Cⁱo Cⁱa]

4.2 音素配列規則

次の音素配列は稀少ないし不適格である:

- (8) a. ?/VVV/: ex. /aoigusa/ ?? ‘薄’^{オホキ}
 b. ?/VVM/: ex. /nebaan/ ?? ‘真綿’^{マキ}, /sorooQto/ ?? ‘密かに’, /ioN/ A ‘イオン (AEON)’
 c. ?/fi, fa/: ex. /toofii, toofaa/ B ‘豆腐に; 一は’, /fiite/ A ‘拭いて’ or B ‘吹いて’
 d. ?/wi, we/: ex. /wiite/ A ‘浮いて’, /siwee/ B ‘塩に’
 e. ?/#N—/ (cf. (13)): ex. /NNme/ A ‘梅’, /NNma/ B ‘馬’, /NNmaka/ B ‘旨い’ etc.
- (9) */GC/, */GM/, */ji, je/, */CC/, */CM/, */wu, wo/, */QV/, */QN/, */QQ/, */NQ/, */nu#/
 (cf. /iN/ ‘犬’, /siN/ ‘死ぬ’, /keN/ ‘絹’), */#Q/, */Q#, */—NN⁶

里方言は /Cw/ を許容しないので、当方言の /w/ は半母音音素ではなく、子音音素である (cf. (4b, c))。次の例もこのことを示している:

る /p/ は、次のように幅広く分布している (いずれも小川 2012 に拠る):

- (I) /sepirowata/ ?? ‘腸’, /siQtonpee/ ?? ‘一番後ろ’, /ciQcjanpee/ ‘櫃’, /zaQperazaa/ ?? ‘いい加減’,
 /maQpoosi/ ?? ‘真正面’, /pojanSu/ ?? ‘肛門’, /aQponcjan/ ?? ‘がっかり’, /daQpai/ ?? ‘黙る’,
 /kaQpaN/ ?? ‘鞆’, /kaNpaci/ ?? ‘早魃’, /suQpakuroo/ ?? ‘いい加減な怠け者’, /suQpato/ ?? ‘全部’

⁵ 岐阜方言の [nebaⁱ] ‘真綿’ と同源か。

⁶ /iN.no.ku.so.NN.bee/ B ‘アケビ’ は語中に /NN/ を含むが、これはいかにも複合語である。(i) アケビもムベもアケビ科であることと、(ii) アケビの形状を踏まえて、/iN=no#kuso+NNbee// (犬=属格#糞+ムベ) と見做す。

- (10) /wjaate/ [w^ja:te] A ‘沸いて’, /juwjaa/ [juw^ja:] A ‘言えば’, /kawjaa/ [kaw^ja:] A ‘買えば; 川に’ or B ‘皮に’

/VV/ は適格ではあるが、次の組み合わせに限られる:

- (11) a. /ii, uu, ee, oo, aa/: e.g. /cikii/ B ‘棒秤り’, /juuki/ A ‘雪’, /eebu/ A ‘海老’, /oomi/ B ‘海’, /saaru/ B ‘猿’
 b. /ui, ei, oi, ai/: e.g. /nuui/ A ‘寝る; 塗る’, /kisei/ [k^jisei or k^jise:] A ‘煙管’, /oi/ A ‘俺; 居る’ or B ‘折る’, /ai/ B ‘有る’
 c. /au/: e.g. /au/ B ‘合/会う’, /kau/ A ‘買/飼う’ (cf. /uu/ A ‘追う’)

4.3 音韻的音節

次のように、里方言の音韻的音節は {C}{G}V{V/M} ({A}: A は選択要素) を基本単位としている:

- (12) /o/ A ‘緒’, /oN/ B ‘ウニ’, /kjaa/ B ‘貝; 櫂’, /u.u/ A ‘追う’, /i.ge/ A ‘棘’, /go.so/ A ‘兎’, /bjaa.ra/ ?? ‘柴の葉が落ちたもの’, /kaN.maN/ B ‘構わない’, /koN.doo.ra/ ?? ‘海鼠’, /taQ.go.ja/ ?? ‘別棟の台所’

圧倒的に少数派ではあるが、次のように長鼻音 /NN/ で始まる語もある:

- (13) /NN/ ?? ‘俺’, /NN.me/ A ‘梅’, /NN.ma/ B ‘馬’, /NN.bee/ B ‘ムベ (植物)’, /NN.ma.ka/ B ‘旨い’, /NN.me.bee/ ?? ‘ウバメガシ (植物)’, /NN.do.gai/ A ‘俺{達}の家’

語 (13) は次のように発音されるので、その語頭の /NN/ は 2 モーラである:

- (14) /NNma/ [m[↑]:「ma or m:「ma] ‘馬’, /NNdomodemo/ [n[↑]:「domo「demo/ ‘俺達でも’
 (注) ↑: 上昇 ↓: 下降

/NN/ が 1 音節であることを実証する資料は得ていない⁷。/NNCV—/ を /N.NCV—/ と解釈すると、音韻的語の音節構造が複雑になるので、/NN.CV—/ と解釈しておく。

以上のことを総合して、音韻的語の音節構造を次のように定式化する:

- (15) /PRE{NN}.1st{C}{G}V{M}.2nd{C}{G}V{M}.3rd{C}{G}V{M}. ... /⁸

⁷ 児玉 (2012: §3.1) は、里方言の語声調について次のことを指摘している:

- (II) 副頂点側では、中韻の MH [発表者注: M は中平ら。H は高平ら] にほぼ対応する形で 2 音節以内の高平調が現われるが、冒頭音節が長音節であっても高いピッチが 2 音節目まで持続する語例も出る。

したがって、/NN/ が 1 音節であることを実証するには、次のように語頭 3 モーラを高く発音する例を提示しなければならない:

- (III) /NNmadake/ [m:ma[↑]da{「ke] ‘馬だけ’, /NNdomosaka/ [n:do[↑]mo{「sa{「ka] ‘俺達さえ’

⁸ この方が次の定式化よりも簡潔である:

- (IV) /1st NN or {C}{G}V{M}.2nd{C}{G}V{M}.3rd{C}{G}V{M}. ... /

表 5 里方言の名詞基幹句

	/	tooki	aaku	ike	koko	ika	hi	toofu	he	ho	ha	/
		‘時’	‘灰汁’	‘池’	‘此处’	‘イカ’	‘火’	‘豆腐’	‘屁’	‘帆’	‘齒’	
属-主格	/	tookin	aakuN	ikeN	kokoN	ikaN	hiN	toofuN	heN	hoN	haN	/
向格 ⁺	/	tookii	aakii	ikee	kokee	ikjaa	hii	toofii	hee	hee	hjaa	/
主題	/	tookjaa	aakaa	ikjaa	kokaa	ikaa	hjaa	toofaa	hjaa	haa	haa	/
	/	miici	naacu	te	futo	hata	kuni	—	gane	fukiho	hana	/
		‘道’	‘夏’	‘手’	‘人’	‘旗’	‘国’		‘蟹’	‘布巾’	‘花’	
属-主格	/	miiciN	naacuN	teN	futoN	hataN	kuniN	—	ganeN	fukinoN	hanaN	/
向格 ⁺	/	miicii	naacii	tee	futee	hatjaa	kunii	—	ganee	fukinee	hanjaa	/
主題	/	miicjaa	naacjaa	tjaa	futaa	hataa	kunjaa	—	ganjaa	fukinaa	hanaa	/
	/	toi	koi	fue	sio	—	cikii	cuu	kjaa	iN	hoN	/
		‘鳥’	‘此れ’	‘笛’	‘塩’		‘棒稗り’	‘瘡蓋’	‘貝’	‘犬’	‘本’	
属-主格	/	toino	koino	fueN	sioN	—	cikiino	cuuno	kjaano	iNno	hoNno	/
向格 ⁺	/	tooi	koree	fuee	siwee	—	cikiini	cuuni	kjaani	iNni	hoNni	/
主題	/	toojaa	koraa	fujaa	siwaa	—	cikiiwa	cuuwa	kjaawa	iNna	hoNna	/

(注1) 話者 [口, ト] は‘夏’を /naacaa/ とも言う。形態音韻規則に適う音形はむしろこれであるが、ほとんどの話者は /ca/ を失っている(‘お父さん’も /otoqcjan/)。

(注2) 話者 [口, ニ] は‘塩’を /siwo/ とも言う。形態音韻規則に適う音形はむしろこれであるが、ほとんどの話者は /wo/ を失っている (/we/ [ʷe] は /e/ [e] と対立している)。

5 形態音韻規則

5.1 //Vi// の実現規則

5.1.1 向格助詞句

里方言の名詞基幹句(助詞句)は表3(p.2)で確認したが、例を増補して、表5に示す: 発表者は次の事実(cf.表1(p.2))を踏まえて、表5の向格助詞句を表6(次頁)のように分析する:

表 6 向格助詞句の表層形と基底形

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]
// —V _i V _i	—V _[+q] i	—V _[-q] i	—i	—u	—e	—o	—a	—N //
/ —VVni	—V _[+q] ini	—V _[-q] V _[-q] ii	—Cii	—Cii	—Cee	—Cee	—Cjaa	—Nni /
// —VV=ni	—V _[+q] i=ni	—V _[-q] i=i	—Ci=i	—Cu=i	—Ce=i	—Co=i	—Ca=i	—N=i //

(16) a. 里方言と標準語との分節音対応 (cf. 表 1)

標準語: [ui oi ai]

里方言: [i: e: ja:]

b. /ei/ の音価の揺れ: /ei/ [ei or e:] A ‘襟’ or B ‘選る’, /kei/ [kei or ke:] B ‘蹴る; 蹴り’, /kisei/ [k^hisei or k^hise:] A ‘煙管’

そして、実現規則 (17) を立てて、向格助詞句 [表 6: 5–8] の形成過程を (18) のように推定する:

(17) a. //ui// → /ii/ b. //ei, oi// → /ee/ c. //ai// → /jaa/

(18) a. //toofu=i// b. //me=i//
 ↓ 実現規則 (17) ↓ 実現規則 (17)
 /toofii/ B ‘豆腐に’ /mee/ B ‘目に’

c. //sio=i// d. //hata=i//
 ↓ 実現規則 (17) ↓ 実現規則 (17)
 /siwee/ B ‘塩に’ /hatjaa/ A ‘旗に’

なお、実現規則 (17) は動詞の形成にも関与するので、この場限りのものではない (詳しくは次節で)。

5.1.2 連結形動詞

里方言の動詞の分析はそれほど難しくない。表 7 (次頁) のように、大半のものは語幹と接尾辞とに分析できる:

ただし、連用.連結形動詞 (以下“連結形動詞”) は語幹と接尾辞とに分け兼ねるので、表 7 では仮に //te, -de// を接尾辞と、残りを語幹としておく。表 7 に挙げる連結形動詞の語幹末尾音列は、他のそれとは次のように異なる:

/ii, ee, jaa/ は実現規則 (17) で産出される音列である。よって、次の変換規則と実現規則 (17) とを組み合わせれば、表 7 の表層形が産出できる:

(19) //k, g, s// → /i// _-!suffix

表 7 里方言の k・g・s 語幹動詞

	‘吹(く)’	‘蒸(す)’	‘漕(ぐ)’	‘押(す)’	‘書(く)’	‘剥(ぐ)’
連用.連結.否定	/fuk-a-ziN	mus-a-ziN	kog-a-ziN	os-a-ziN	kak-a-ziN	hag-a-ziN /
連用.連結	/fii-te?	mii-te?	kee-de?	ee-te?	kjaa-te?	hjaa-de? /
連用.目的	/fuk-i-kja	mus-i-kja	kog-i-kja	os-i-kja	kak-i-kja	hag-i-kja /
連用.仮定.順接	/fuk-jaa	mus-jaa	kog-jaa	os-jaa	kak-jaa	hag-jaa /
終止-連体.平叙	/fuk-u	mus-u	kog-u	os-u	kak-u	hag-u /

- (20) a. //fuk-!te//
 ↓ 変換規則 (19)
 //fui-!te//
 ↓ 実現規則 (17a)
 /fiite/ B ‘吹いて’
- b. //kaes-!te//
 ↓ 変換規則 (19)
 //kaei-!te//
 ↓ 実現規則 (17b)
 /kaeete/ B ‘返して’
- c. //os-!te//
 ↓ 変換規則 (19)
 //oi-!te//
 ↓ 実現規則 (17b)
 /eete/ A ‘置いて’
- d. //hag-!te//
 ↓ 変換規則 α⁹
 //hag-!de//
 ↓ 変換規則 (19)
 //haide//
 ↓ 実現規則 (17c)
 /hjaade/ B ‘剥いで’

変換規則 (19) が連結形動詞にしか適用されないという点は遺憾である。それでも、/fii-/ ‘吹いて; 拭いて’ や /kaee-/ ‘返し(て)’ を“音便語幹” (cf. 南 1962, 丹羽 2005) として穏便に済ますよりは、里方言の形態音韻論の解明に努めているように思う。

“-!suffix” は、語幹の音形を (19) のように変換する接尾辞を指す。この表記法に従って、連結形接尾辞は //!te// とする¹⁰。

⁹ 次のように //!te// の初頭子音音素 //t// を //d// に変換する規則:

(V) //t// → /d// C_[+voice or +nas]-!__

¹⁰ b・g・m・n 語幹に接尾する時は /de/ で、その他の時は /te/ 実現する。その基底形を //!te// とするのは、次の事実に拠る:

(VI) 里方言では、語頭の //t// が複合語形成時に連濁すると、/d/ で実現する。

5.1.3 実現規則 (17) の制約

実現規則 (17) は、全ての //ui, ei, oi, ai// に適用されるわけではない。なぜなら、次のような語が存在するからである:

- (21) a. /ui/: e.g. /ui/ B ‘瓜’, /bui/ A ‘ブリ’, /kui/ B ‘栗’¹¹, /jurui/ B ‘囲炉裏’, /juika/ ‘イルカ’
 b. /ei/: e.g. /ei/ [ei or e:] A ‘襟’, /eiei/ [eiei, *e:e:] B ‘戦争ごっこ’, /kisei/ [kⁱisei or kⁱise:] A ‘煙管’
 c. /oi/: e.g. /oigo/ A ‘甥’, /toi/ A ‘鳥’, /tokoi/ A ‘所’, /koibeeso/ B ‘農作業のゴミを入れる籠’, /goi/ ?? ‘水の沈殿物’, /nigagoi/ B ‘苦瓜’, /noi/ B ‘海苔’
 d. /ai/: e.g. /aita/ B ‘明日’, /aibazin/ B ‘歩かず’, /kaiki/ ?? ‘緑肥’, /haibjoo/ A ‘結核’, /mai/ B ‘鞠’, /nai/ B ‘苗’, /jaiki/ B ‘屋敷’

語 (21) はいずれも名詞である。里方言の名詞形態論に拠れば、音列 (21: 太字部) は特定の形成過程を経た (= 特定の変換規則, 実現規則が適用された) ものではなく、基底でも //ui, ei, oi, ai// である。しかし, (21) のとおり, 実現規則 (17) は適用されない。

それに対し, 実現規則 (17) が適用される向格助詞句, 連結形動詞の //ui, ei, oi, ai// は, 形態素連鎖の結果, 生じたものである (§5.1.1, 5.1.2)。発表者はこのことを踏まえて, 実現規則 (17) を次のように改める:

- (22) a. **secondary** //ui// → /ii/ b. **secondary** //ei, oi// → /ee/
 c. **secondary** //ai//
 → /jaa/

向格助詞句, 連結形動詞の //ui, ei, oi, ai// と名詞 (21) のそれとは, “secondary” という条件で区別される。この条件を欠くと, //ui, ei, toi, aita// ‘瓜; 襟; 鳥; 明日’ などは /ii, ee, tee, jaata/ で実現してしまう。

表 8 里方言と標準語との分節音対応

	[nob ⁱ a:gaɪ]	‘伸び上がる’	[nob ⁱ iagaɾu]	
	[ok ⁱ a:gaɪ]	‘起き上がる’	[ok ⁱ iagaɾu]	
	[oko ^ɕ ɕa:gaɪ]	‘起こし上げる’	[oko ^ɕ iagaɾu]	
	[mott ^ɕ ɕa:gaɪ]	‘持ち上げる’	[mott ^ɕ iagaɾu]	
里	[tsukk ^j a:]	‘付き合い’	[tsuk ^j iai]	標
方	[o ^ɕ ɕaɪ]	‘押し合い’	[o ^ɕ ɕiai]	準
言				語
	[hag ⁱ aagaɪ]	‘禿げ上がる’	[hageagaɾu]	
	[jo ^ɕ a:gaɪ]	‘寄せ上がる’	[joseagaɾu]	
	[jo ^ɕ a:gaɪ]	‘寄せ上げる’	[joseagaɾu]	
	[m ⁱ ɕɕagete]	‘お見せして’	[m ⁱ iseagete]	

5.2 //Va// の実現規則

発表者は, 里方言と標準語との分節音対応 [表 8] を踏まえて, 表 5 (p. 2) の主題助詞句を

¹¹ /kuri/ [kuɾi] と発音する話者 [ホ, チ] は, 「栗’ は甑島では取れないから, [kui] とは言わない」と述べていた。回答語形に対する “馴染み度” の影響は, 突き止めていない。

表 9 主題助詞句の表層形と基底形

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]	[6]	[7]	[8]	[9]
// -V _i V _i	-V _[+η] i	-V _[-η] i	-i	-u	-e	-o	-a	-N //
/ -VVwa	-V _[+η] iwa	-V _[-η] V _[-η] jaa	-Cjaa	-Caa	-Cjaa	-Caa	-Caa	-Nna /
// -VV=wa	-V _[+η] i=wa	-V _[-η] i=a	-Ci=a	-Cu=a	-Ce=a	-Co=a	-Ca=a	-N=a //

表 9 のように分析する:

そして、実現規則 (23) を立てて、主題助詞句 [表 9: 3-6] の形成過程を (24) のように推定する:

- (23) a. //ia, ea// → /jaa/ b. //ua// → /aa/
 (24) a. //miici=**a**// b. //toofu=**a**//
 ↓ 実現規則 (23a) ↓ 実現規則 (23a)
 /miic**jaa**/ A ‘道は’ /toof**aa**/ B ‘豆腐は’
 c. //te=**a**//
 ↓ 実現規則 (23b)
 /t**jaa**/ B ‘手は’

実現規則 (23) は、次に挙げる動詞句の形成過程においても働いていると考えられる:

- (25) a. //cigaw-**u**=**a**// b. //si-moos-**u**=**a**//
 ↓ 実現規則 (23a) ↓ 実現規則 (23a)
 /cigaw**aa**/ A ‘違うよ’ /simoos**aa**/ A ‘しますよ’
 c. //sakura=jar-**u**=**a**// cf. //ita-**ka**=**a**//
 ↓ 実現規則 (23a) ↓
 /sakura(#)jar**aa**/ A(#)B ‘桜だよ’ /itak**aa**/ B ‘痛いよ’

したがって、実現規則 (23) もこの場限りのものではない。

5.3 //Vu// の実現規則

発表者は形容詞の構造と b・m・w 語幹動詞の構造とに共通点を見出して、両者を表 10, 11 (次頁) のように分析する:

そして、変換規則 (26, 27) と実現規則 (28) とを立てて、表 10, 11 に挙げる連結形形容詞・動詞の形成過程を (29) のように推定する:

- (26) //VV// → //V// / __-V (cf. (8a))
 (27) //C_[LAB]// → //u// / __-!suffix

表 10 里方言の形容詞

	‘痒(い)’	‘煙(い)’	‘多(い)’	‘大(い)’	‘可愛(い)’	‘痛(い)’	
終止-連体.平叙	/ kai-ka	kebu-ka	uu-ka	futo-ka	mizjoo-ka	ita-ka	/
連用.假定.順接	/ kai-kar-ja	kebu-kar-ja	uu-kar-ja	futo-kar-ja	mizjoo-kar-ja	ita-kar-ja	/
連用.連結	/ kajuu	kebu-u	uu	futoo	mizjoo	itoo	/
	// kai-u		uu-u	futo-u	mizjoo-u	ita-u	//

表 11 里方言の b・m・w 語幹動詞

	‘飛(ぶ)’	‘叫(ぶ)’	‘組(む)’	‘読(む)’	‘言(う)’	‘買(う)’	
連用.連結.否定	/ tob-a-ziN	orab-a-ziN	kum-a-ziN	jom-a-ziN	juw-a-ziN	kaw-a-ziN	/
連用.連結	/ too-de?	oroo-de?	kuu-de?	joo-de?	juu-te?	koo-te?	/
連用.目的	/ tob-i-kja	orab-i-kja	kum-i-kja	jom-i-kja	juikja	kaikja	/
	//				juw-i-kja	kaw-i-kja	//
連用.假定.順接	/ tob-jaa	orab-jaa	kum-jaa	jom-jaa	juw-jaa	kaw-jaa	/
終止-連体.平叙	/ tob-u	orab-u	kum-u	jom-u	juu	kau	/
	//				juw-u	kaw-u	//

(28) a. secondary //iu// → /juu/

b. secondary //ou, au// → /oo/

(29) a. //kai-u//

b. //mizjoo-u//

↓ 実現規則 (28)

↓ 変換規則 (26)

/kajuu/ B ‘痒く’

//mizjo-u//

↓ 実現規則 (28)

/mizjoo/ A?? ‘可愛く’

c. //jom-lte//

d. //kaw-lte//

↓ 変換規則 α

↓ 変換規則 (27)

//jom-lde//

//kau-lte/

↓ 変換規則 (27)

↓ 実現規則 (28)

//jou-lde//

/koote/ A ‘買って’

↓ 実現規則 (28)

/joode/ B ‘読んで’

5.4 長母音化

[表 6: 3] (p. 2) と [表 9: 3] とに示したとおり, //—V_[−f]i// を基幹とする向格助詞句と主題助詞句とは, /—V_[−f]V_[−f]ii, —V_[−f]V_[−f]jaa/ で実現する。その規則と形成過程とは次のとおり:

(30) //V_[−f]// → /V_[−f]V_[−f]/ / __i=V

(31) a. //kui=i//

↓ 実現規則 (30)

/kuuui/ B ‘栗に’

b. //toi=a//

↓ 実現規則 (23a, 30)¹²

/toojaa/ A ‘鳥は’

c. //mai=a//

↓ 実現規則 (23a, 30)

/maajaa/ B ‘鞠は’

5.5 短母音化

次のように, 伝統的な里方言では, /{{C}}{{G}}V_[+h]/ ({{A}}: A は選択必須要素) で終わる単純名詞 (=1 名詞語幹から成る名詞) の次末尾音節を /—VV/ にしていることが多い¹³:

(32) a. /mii.mi (or miNmi)/ B ‘耳’, /ii.si/ A ‘石’, /guu.mi/ ?? ‘グミ (果物)’, /kuu.ci/ A ‘口’, /uu.si/ A ‘牛’, /muu.gi/ B ‘麦’, /na.suu.bi/ B ‘茄子’, /mee.si/ ?? ‘飯’, /see.zi/ ‘網染め’, /nee.gi/ B ‘葱’, /oo.bi/ B ‘帯’, /oo.mi/ B ‘海’, /joo.ki/ ?? ‘斧’, /kaa.mi/ A ‘紙’, /aa.si/ B ‘足’, /kaa.ki/ A ‘柿’ or B ‘牡蠣’

b. /uu.su/ B ‘臼’, /ee.bu/ A ‘海老’, /hee.bu/ B ‘蛇’, /sa.see.bu/ ?? ‘シャシヤンポ (樹木)’, /se.mee.zu/ ?? ‘ハツタケ (茸)’, /kaa.bu/ A ‘黴’, /maa.cu/ B ‘松’, /kaa.su/ ?? ‘谷川などにいる何かの幼虫’, /ka.raa.su/ ?? ‘カラス’, /to.maa.su/ ?? ‘鮃’, /hi.raa.su/ ?? ‘ヒラス (魚)’

語 (32) の次末尾音節の長母音は次のように単母音と対立しているので, 音韻的に有意である (無作為に長音化させているわけではない):

¹² (23a) と 30) のどちらが先に適用されるか (=両者の間に適用順位の差があるか否か) は不明。

¹³ (VII) のように, 反例は非単純名詞 (あるいは, それと疑われるもの) に多い:

- (VII) a. /o.de.i.si/ ?? ‘網の端の重り石’, /ho.do.ki/ ‘稼ぎ’, /ja.u.ci/ ?? ‘親戚 (< 家内)’, /ta.jo.mi/ ?? ‘田ならし’, /cuQ.go.mi/ ?? ‘十五夜に二人で行なう勝負事 (蔓を絡ませ合って, 水平状に抑え込んだ方を勝者とする)’, /i.ne.ko.gi/ B ‘脱穀’, /saN.mjaa.a.mi/ ?? ‘三枚網’, /o.to.gjaa.na.si/ ?? ‘カタクチイワシ (< 顎無し)’ (cf. /si.bi/ ?? ‘鮪’, /ka.bu.si/ ?? ‘撒き餌’, /mi.cu.da.si/ ?? ‘下水溜め’)
- b. /i.so.gi.ku/ ?? ‘薩摩野菊’, /hoo.ta.ru/ B ‘蝨’, /keN.ci.ma.su/ ?? ‘キビナゴなどを計る一升枘’ (cf. /mi.zu/ A ‘水’, /o.ja.ku/ ?? ‘親戚’, /ton.ko.cu/ ?? ‘フジツボ’, /dee.so.ku/ ?? ‘松の薪’)

- (33) a. /usu/ B ‘口笛’ vs. /uus/ B ‘臼’
 b. /kaki/ B ‘書き’ vs. /kaaki/ A ‘柿’ or B ‘牡蠣’
 c. /macu/ B ‘待つ’ vs. /maacu/ B ‘松’
 d. /kasu/ A ‘貸す’ vs. /kaasu/ ‘谷川などにいる何かの幼虫’

語 (32) の次末尾音節の長母音は、属格助詞 //N// を取る時 (34a) も保たれるが、複合語前項になる時 (34b) は短音化する。

- (34) a. /aasi=N#djaa/ B#B ‘足の甲 (< 足の台)’, /aasi=N#hara/ B#B ‘足の裏’
 b. /asikuubi/ //aasi+kuubi/ B ‘足首’, /asiguse/ //aasi+kuse// B ‘足癖’

語 (34b) の類例を次に挙げる¹⁴:

- (35) a. /tooki/ B ‘時’ → /tokidooki/ //tooki+tooki// B ‘時々’
 b. /kuuci/ A ‘口’ → /kucifuge/ //kuuci+fuge// A ‘口髭’
 c. /meesi/ ?? ‘飯’ → /mesigjaa/ //meesi+kjaa// ?? ‘杓文字’
 d. /kaami/ A ‘紙’ → /kaNbasaami/ //kaami+hasami// A ‘紙鈔’
 e. /maacu/ B ‘松’ → /macuba/ //maacu+ha// B ‘松葉’

短母音化の規則と形成過程とは次のとおり:

- (36) //VV// → /V// [N [N ___ {{CG}} V_[+h]]+[N ...]]

- | | |
|------------------------|------------------------|
| (37) a. //aasi+kuubi// | b. //tooki+tooki// |
| ↓ 実現規則 (36) | ↓ 変換規則 β ¹⁵ |
| /asikuubi/ B ‘栗に’ | //tooki+dooki/ |
| | ↓ 実現規則 (36) |
| | /tokidooki/ B ‘時々’ |

5.6 形態音 //T//

里方言の一部の動詞は、次のように語幹末子音音素を /t ~ c/ で交替させる:

- (38) a. /kacikja, kacu, katjaa, kate, kato, kataziN/ ‘勝ちに; 勝つ; 勝てば; 勝て; 勝とう; 勝たず’
 b. /mocikja, mocu, motjaa, mote, moto, motaziN/ ‘持ちに; 持つ; 持てば; 持

¹⁴ 次のように短音化しないこともある (その原因は不明):

- (VIII) a. /mooci/ ‘餅’ → /isomoocijaki/ //iso+[N mooci+jaki]// ‘磯餅焼き (磯で焼いた餅 (#焼いた磯餅) を海に投げて、豊漁を願うという年中行事)’
 b. /karaasu/ ‘カラス’ → /karaasuheebu/ //karaasu+heebu// ‘ヤマカガシ (蛇)’
 c. /eebu/ ‘海老’ → /eebugane/ //eebu+gane// ‘ヤマカガシ (蛇)’

¹⁵ 次のように複合名詞後項の語頭子音音素 //C_[-voice, OBS]// を //C_[+voice, OBS]// に変換する規則:

- (IX) //f, h// → /b/ [N [N ...]+[N ___]]
 //t// → /d/
 //k// → /g/

て; 持とう; 持たず'

(38) を踏まえて, 次のように実現する形態音 //T// を設ける:

- (39) //T// → /c/ / __V_[+h]
 → /t/ / elsewhere

形態音 //T// を以って, (38) の基底形を次のように分析する:

- (40) a. / kacikja, kacu, katjaa, kate kato, kataziN /
 //ka**T**-i-kja, ka**T**-u, ka**T**-jaa, ka**T**-e, ka**T**-oo, ka**T**-aziN//
 b. / mocikja, mocu, motjaa, mote, motoo, motaziN /
 //mo**T**-i-kja, mo**T**-u, mo**T**-jaa, mo**T**-e, mo**T**-oo, mo**T**-aziN//

5.7 形態音 //R//

(41) 指示・人称名詞基幹句

- a. /koi, koiba, koino, kojoka, koree, koraa/ ‘此れ; 一を; 一の; 一より; 一に; 一は’
 b. /soi, soiba, soino, soijoka, soree, soraa/ ‘其れ; 一を; 一の; 一より; 一に; 一は’
 c. /ai, aiba, aino, ajoka, aree, araa/ ‘あれ; 一を; 一の; 一より; 一に; 一は’
 d. /doi, doiba, doino, doijoka, doree, doraa/ ‘どれ; 一を; 一の; 一より; 一に; 一は’
 e. /oi, oiba, oino, oijoka, oree, oraa/ ‘俺; 一を; 一の; 一より; 一に; 一は’

(42) <過去> を表す動詞

- a. /kjaata, kjaataijoo, kjaataiba, kjaataroo/ ‘書いた; 一ただろう; 一たら; 一たろう’
 b. /ageta, agetaijoo, agetaiba, agetaroo/ ‘上げた; 一ただろう; 一たら; 一たろう’
 c. /kita, kitaijoo, kitaiba, kitaroo/ ‘来た; 一ただろう; 一たら; 一たろう’

(41, 42) を踏まえて, 次のように実現する形態音 //R// を設ける:

- (43) a. //Ru// → /i/ / __V/G
 → /Ø/ / __C/#
 b. //Re// → /i/ / __G/C/#
 → /re/ / __V
 c. //Ro// → /ro/

形態音 //R// を以って, (41, 42) の基底形を次のように分析する:

- (44) a. / koi, koiba, koino, kojoka, koree, koraa /
 //ko-**Re**, ko-**Re**=ba, ko-**Re**=no, ko-**Re**=joka, ko-**Re**=i, ko-**Re**-a//
 b. / kjaata, kjaataijoo kjaataiba, kjaataroo /
 //kak-!ta**R**-u, kak-!ta**R**-u=joo, kak-!ta**R**-eba, kak-!ta**R**-oo//

参考文献

- 荒木 博之 (編) (1970) 『甌島の昔話』, 三弥井書店: 民話集
- 有元 光彦 (2007) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』, ひつじ書房
- 尾形 佳助 (1987a) 「上甌島瀬上方言の形態音韻論」, 九州大学大学院人文科学府・昭和 62 年度修士論文, 未公刊
- 尾形 佳助 (1987a) 「上甌島瀬上方言の形態音韻論」, 九州大学大学院人文科学府・昭和 62 年度修士論文, 未公刊
- (1987b) 「上甌瀬上方言の子音体系」, 『九州大学言語学研究室報告』 8, 九州大学文学部
- (1988a) 「上甌瀬上方言の人称代名詞」, 『九州大学言語学研究室報告』 9, 九州大学文学部
- (1988b) 「上甌瀬上方言の音韻の記述」, 『日本方言研究会 第 46 回研究発表会 発表原稿集 (於国学院大学)』, pp. 46–54, 日本方言研究会
- 小川 辰雄 (2012) 『さとことば (里方言)』, 南勢出版: 辞書
- 上村 孝二 (1936) 「甌島方言の系統に就いて」, 『九大國文學會誌』 11, pp. 51–55, 九州帝國大學國文學研究室
- (1937) 「甌島語彙考」, 『九大國文學會誌』 12, pp. 29–37, 九州帝國大學國文學研究室
- (1941a) 「甌島方言のアクセント」, 『音声学協会会報』 65, 66, 音声学協会 (再録: 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) 『日本列島方言叢書 27 九州方言考 5 (鹿児島県)』, pp. 217–21, ゆまに書房)
- (1941b) 「甌島方言文例」, 『九大國文學會誌』 17, pp. 38–52, 九州帝國大學國文學研究室
- (1965) 「上甌島瀬上方言の研究」, 『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』 1, pp. 21–49, 鹿児島大学法文学部
- 児玉 望 (2012) 「甌島の二型アクセント」, 『ありあけ 熊本大学言語学論集』 11, pp. 47–68: アクセント研究
- 里村教育委員会 (編) (2003) 『郷土の民話』, 私家版
- 里郷土史編纂委員会 (編) (1985) 『里村郷土史』 丹羽 一彌 (2005) 『日本語動詞述語の構造』, 笠間書院
- 丹羽一彌 (編) 『用言複合体の研究——日本語はどのような膠着語か——』, 笠間書院
- 南 不二男 (1959) 「長崎県口之津方言の音韻体系」, 『国語学』 36, pp. 1–14, 国語学会
- (1962) 「三 文法」, 国語学会 (編) 『方言学概説』, pp. 209–55, 武蔵野書院
- (1966) 「長崎県口之津方言の形態音韻論」, 『言語研究』 49, pp. 11–27, 日本言語学会

* 甲南女子大学特任講師, 蛭池言語研究所所長

E-mail: nihon5_no_ken9@yahoo.co.jp

URL: <http://hotarugaikegengokenkyuuzyo.web.fc2.com/>